

「カナダの萬蔵物語」周辺

一 雅 川 増



「永野萬蔵」に関する日本側の資料や記録は皆無に等しい。出身地である長崎県島原半島の口之津町には生家も残っており、甥の子に当たる親類縁者が健在であるが、僅かに、晩年の萬蔵を見たとの老人の話が聞けるだけで、写真の一片も無い。

ただ、町役場の戸籍簿と墓から、確かに、萬蔵と言う男が、江戸時代末期から大正時代末期にかけて「生息した」ことが認められるのみである。

萬蔵は、安政二年(一八五五)三月二十七日、口之津村四二五番地、永野喜平・夕子との間に誕生。六人兄(姉)弟の第五子(四男坊)である。戸籍簿には詳細な記述はないが、明治十七年五月七日、永野田吉との養子縁組を解消して復籍。明治二十年十月二十九日、神奈川県横浜区界町へ分家しており、戸籍は横浜へ送付されている。

その横浜の戸籍簿は、関東大震災の折り、焼失している。したがって、戸籍の上では、萬蔵の生涯は完結していないのである。

ところが、永野家の菩提寺である名刹「玉峰寺」には、過去帳に萬蔵の死が記録されており、墓も建てられている。

それによると、萬蔵は、大正十三年(一九二四)五月二十一日、その六十九年に及ぶ生涯を、口之津村で終えている。「妻多誉子建之」の墓の碑銘は、人生の大半を「からんくに」カナダで過ごした日本人「萬蔵」を彷彿させるかの様に、雄大なカナダの自然を映して「千岳院萬嶺實相居士」とある。

萬蔵をテーマに、テレビ・ドキュメンタリーの制作に取りかかったものの、そ

の前途は暗澹たるものであった。しかし、今回出版された「カナダの萬蔵物語」の著者、高見弘人氏を宮崎県延岡市に、又、萬蔵の生家近くからカナダに移住したと言う北村高明氏をカナダ・トロントに探し当てたことによつて、取材は飛躍的に発展し、萬蔵の足跡を追つてカナダ現地への取材が実現したのであった。

駐日カナダ、アメリカ画大使館、トロント、バンクーバー画日系市民協会、日系カナダ移民百年祭協会、それに、日本航空株式会社の絶大な支援と協力で、取材は昨年夏完了し、ドキュメンタリーは、「萬蔵の旅―日系カナダ移民百年の記録―」のタイトルで、昭和五十二年度芸術祭参加作品として、同年秋に放映した。この稿を借りて、改めて関係方面にはお礼を申し上げたい。

さて、高見氏の「カナダの萬蔵物語」の書評を、と言うことでこの拙文となつた次第であるが、感想と言うことでお許し頂ければ、深い眠りに就いていた萬蔵が、この本によつて魔法の杖で甦つたかの印象を受けた。数少ない資料と記録で、萬蔵像をかくも浮かびあがらせることができたのは、高見、森両氏の萬蔵に対する深い人間愛、ひいては日系カナダ移民



萬蔵の孫と曾孫のハハハロルド・マンゾー。トロント郊外ビクター・マンゾー。(長崎放送提供)

の百年に及ぶ苦闘の歴史に対する敬意の表われ、と私は確信している。

ただ、ドキュメンタリストとして、非礼を顧みず、ひとこと感想を追加させて頂くとすれば、萬蔵を日系カナダ移民の第一号とするあまり、やや「ウルトラマン」にしすぎたのではないかとの懸念を持たざるを得ない。

萬蔵の故郷口之津は、「からゆきさん」旅立ちの港として知られている。明治になつて口之津のある島原半島や対岸の天草の島々から、多くの人が、朝鮮、台湾、樺太、東南アジア、その他の国々へ渡つて行つた。この地方では、外国は全て「からんくに」であり、外国に渡航することを「からゆき」と言つた。記録は少ないが、大正五年の口之津村役場統計では、一七九四戸から六四七人もの村民が海外へ出稼ぎに行つてゐる。

萬蔵も、その「からゆきさん」の一人であるが、カナダに渡つた目的について、萬蔵自身は何一つ記録を残していない。

当時、口之津地方の産物と言へば、「甘藷」と「鰯」だけであつた。中には、あるいは、明治維新で海外雄飛の夢を実現しようとした村民もいたかも知れないが、しかし、「からゆき」は、紛れもなく、貧しさに追われてのことであつた。一漁民の四男であつた萬蔵も例外ではなかつた。

萬蔵は、明治十年(一八七七)、カナダのニュー・ウェストミンスターに第一歩を印したと言われる。しかし、公的な記録は一切なく、加奈陀大陸時報社が大正年間に発刊した「加奈陀同胞発展大鑑」等に、僅かに、その記述を見出すだけである。

カナダに上陸した萬蔵は、フレイザー

川での鮭漁、ガスタウンでの沖仲仕、貨物船船員旅館、みやげ品店経営等と転々としたが、おそらく、胸には「錦衣帰国」の夢があり、言語、習慣の障壁や、東洋人差別や迫害の現実と闘い続ける毎日であつた。それは、萬蔵以後、カナダに渡つた日本人全て同様であつたらう。

その人々に対して、近代国家への歩みを始めたばかりとは言へ、当時の日本は、何の施策も持ち合わせなかつた。同胞たちは、自らの貧しい生活を速い海外への出稼ぎでしか癒すことが出来なかつたのである。

バンクーバーの市営墓地で見た墓の碑銘に「惨死」と刻んだ日本人墓があつた。それは速い異国の地で、その「旅」を終えねばならなかつた人々の「無念さ」の象徴と思われた。

萬蔵が「カナダ大尽」と呼ばれ、いわゆる「成功者」となつた事実はそれとして、その陰には、例えば、同胞をも蹴落したり、あるいは、見殺しにしたりといつた、生存本能とも言える人間の業が、きつとあつたと思う。

カナダに、アメリカに、萬蔵の足跡を辿りながら、その想いに涙を禁し得なかつた。これは、単なる「冒険談」であつてはならない。

ナイアガラに近い「ニッポニア・ホーム」で余生をおくる一世の老人たちと逢い、トロント郊外では、萬蔵の曾孫に当たる「マンゾー・ハロルド」(一才二ヶ月の混血男児)と面会して、実はホツとした。そこには、人生の勝者の着りなど一分も入り込む余地のない、人間の逞しい歩みがあつた。

(長崎放送制作部ディレクター)